

### 3 主な購入作品：コレクション展でも展示

いまむら ふうみ  
今村 文（別紙②）

《無題》

2016年 エンコースティック・漆喰、パネル φ170.0×4.0cm



いまむらふうみ  
今村文の作品は、みつろう  
などに顔料を混ぜた絵具を熱してしっくい  
に焼き付ける、エンコースティックという技法で描かれています。折り重なって溶け合う草花は、画面の外の大地へと無限に広がっていくかのようなようです。古代ギリシャ、ローマ時代に壁画や建築装飾などに広く用いられたこの最古の絵画技法が生み出す、もんよう  
のように結晶化した草花は、今村が長い時間をかけて画面と格闘した痕跡でもあります。

やました たくや  
山下 拓也 (別紙⑬)

《<sup>たりおん</sup>TALIONの子(<sup>たりおん</sup>TALION <sup>ぎやらりー</sup>GALLERYの壁を使って<sup>らんりょうおう</sup>蘭陵王の彫刻を制作する。)》

2014-15年 蛍光塗料、石膏ボード、合板 398.0×350.0×290.0cm



やましたたくや  
山下拓也は、ある現代美術のギャラリーの壁面を蛍光塗料で塗り分けて切り抜き、穴だらけのギャラリー空間そのものを作品として提示しました。また、切り抜いたパーツを組み合わせ、中国の武将・<sup>らんりょうおう</sup>蘭陵王の像を制作しました。建物の破壊と再構築というプロセスや、普段は作品が架けられる壁が作品の素材になる面白さ、そしてプラモデルのような軽やかな造形が特徴です。